

立教のボランティア

押見 輝男

立教大学ボランティアセンターの開設10周年を心からお祝いします。この歳月の成果はセンター活動に携わってこられた学生、教職員、コーディネーター、関係者のみなさんのご尽力のたまものであり、深く敬意を表します。発足当初は、今日のような盛り上がりもなく、センターの設置場所の確保すらままならず、小さくて静かな存在として誕生しましたが、今や自立した力強い存在へと成長しました。

ボランティアセンターの歴史は10年といっても、立教大学にはボランティア関連活動の長い歴史と幅広い実績があります。ポール・ラッシュ博士の奉仕活動に代表されるチャペルの活動はよく知られていましたし、学生部が助育の精神に基づいて正課外教育としてコーディネートした学内外の学生活動、いくつかの学部の福祉関連活動、校友会とくにレディスクラブのボランティア活動など、センターができる前から多面的に展開されていました。ボランティアセンターは、それらの伝統、実績を土台としながら、既存の諸活動を整理統合する試みとしてではなく、改めて立教大学が教育責任としてボランティア活動に主体的にかかわることを学内外に示し、その目的のための運動体として設立されたのでした。

そもそも立教のアイデンティティ、立教らしさの具現化の一つといえるものが、ボランティア活動です。ボランティアは一般的には、困窮者に対する自己報酬を伴わない奉仕活動と考えられています。しかし、その本質は強者、持てる者が、弱者、持たざる者に自己犠牲的な援助を行うことではありません。上下、強弱の関係を捨て、手助けを求める者と手助けできる者とお互いを尊重しながら協働してことにあたる。その相互作用を通して、それぞれが人間的尊厳と共生、共存の重要性を自覚して人間的成熟を求めようとするヒューマン・ムーブメントです。まさに立教大学が掲げる、キリスト教に基づく人格の陶冶という目標の実践といえます。

十数年前にボランティアセンターの設置を促した背景条件は、国の大学規制の緩和に伴って各大学で起こった大学個性の鮮明化の動きでした。立教の人間教育の歴史は正課教育とともに正課外教育を重視し、学生たちが教室に留まらず、様々な形で「いで立つ」ことを奨励してきました。いで立つとは、他者の方に主体的に向かうことです。ボランティア活動を大学が教育責任をもって支援することは、立教の人間教育の強化につながると改めて自覚されました。さらにセンターがあれば、校友、地域、外部団体と協力連携の道が開け、立教の教育空間の拡大が期待できました。立教のボランティアセンターは開かれた運動体を意図していました。

ボランティアの大事な精神は、自己の価値観、心理を相手に押しつけることを忌避し、相互に受容しあうことで、他者と自己の成長、成熟を願うという姿勢です。それはまた、立教らしさの現われでもあり、立教のバックボーンであるキリスト教聖公会の本質(「あれも、これも」の受容と昇華)です。立教のボランティアセンターが、既存の諸活動の統合を単に求めたものではなかったこと、学生だけでなく、教職員、校友を含めた運動体をめざしたこと、自己犠牲的援助ではなく、互恵・互譲の精神に基づくコラボレーションとしてのボランティア活動を奨励しようとしたことは、立教らしさとして脈々と流れる立教の心の伝統に基づいていました。

立教大学ボランティアセンターの益々の発展を大いに期待する次第です。

(立教大学元総長)